

博士論文要旨

題目：唐代傳奇「枕中記」研究

氏名：伊藤 令子

本論文にて主に扱う沈既濟「枕中記」は、唐代傳奇の代表的な作品の一つであり、あらすじは次の通りである。

唐の開元年間、青年盧生が邯鄲の宿屋で、道士呂翁に自身の不遇な身の上を嘆くと、呂翁は彼に枕を渡す。盧生はその枕を使って横になると、枕の穴の中に入り、そこで立身出世をしたり左遷をされたりと紆余曲折の人生を過ごす。最終的に榮華を極めて人生を終える。そこで盧生が目を覚ますと、もといた邯鄲の宿屋におり、枕に横たわってから、ほんのわずかな時間しか経っていなかった。

現在「枕中記」は、「別の生涯を長い年月過ごすも、目覚めればわずかな時間しか経っていなかった」という時間構造や、「眠り」の要素が作中にあることから、唐代の「夢」物語の一つであり、作中にて盧生が別の生涯を過ごす「枕中の世界」は、盧生が見た「夢」とみなされることが一般的である。実際「枕中記」には「眠り」や「夢」の要素が含まれており、「夢」物語として広く浸透していることは不思議ではない。作者の沈既濟も、「夢」を題材とした物語を意識して「枕中記」を記した可能性は高いだろう。一方で「枕中記」は、その題の通り、作中の「枕」と枕の横にある穴を入口とした物理的空間である「枕中の空間」が存在する。これは、青年盧生にもう一つの生涯を過ごす世界を提供する重要な機能を有しているが、現在この「枕」や「枕中の空間」の存在にはあまり注意が払われておらず、「夢」を題材とした物語としての側面が注目される傾向にある。

こうした「枕中記」に対する捉え方は、物語成立当初から確固たるものとして存在してきたのであろうか、あるいは後世に読み継がれていく過程の中で、「枕中記」は「夢」物語であるという物語認識が一般的なものになっていったのではないか。

本論文ではこのような問題意識の下、「枕中記」の受容の變遷、特に「盧生が別の人生を過ごした物理的空間」としての「枕中の空間」の扱われ方がどのように變化したのか、またそうした變化が起きた背景には何があるのかを主に検討する。

序章では、本論文の目的を述べた上で、主に取り扱う「枕中記」のあらすじを紹介する。加えて、本論文では「枕中記」に次いで、同時代の類話とされる「南柯太守傳」も詳細に取り上げるため、そのあらすじもここでまとめる。また「枕中記」のテキストは主に『文苑英華』所収のものと、『太平廣記』が引用した晩唐の陳翰編『異聞集』出典のもの二系統ある。この「枕中記」のテキストとその流布についてもここで触れる。

第1章「唐代傳奇及び唐代傳奇中の「夢」物語」では、唐代傳奇であり「夢」物語とされる「枕中記」を扱うにあたり、「唐代傳奇」がどのようなジャンルであるのか、また唐代の「夢」物語には具体的にどのような話があるかを概説する。一般的には、六朝にて流行した志怪は、怪を“記録”するという趣旨で記されており、そこに書き手の創作意識は介在しな

かったとされている。それに對して唐代にて發展した傳奇小説は、書き手が創作意識をもって記したものであると言われる。その「創作意識」は、唐代の「夢」物語にも窺え、六朝から唐代の「夢」物語の例を見てみると、六朝志怪の「夢」にまつわる話の多くが、主に豫兆の夢を簡潔に「記録」したものであったのに對し、唐代の「夢」物語は、豫兆の夢の「記録」のみならず、冥界訪問や死者との交歡、現實と夢の一致といった様々な要素が混在する内容となっており、物語としてより読み手の關心を引く内容が描かれる傾向にあることがわかる。

第2章「唐代の「夢」物語に関する先行研究」では、唐代の「夢」物語及び、「枕中記」、「南柯太守傳」に関する先行研究をまとめ、その問題點を分析する。先行研究にて、「夢」の語は、必ずしも人間が睡眠時に見る「儂い夢幻」の概念のみで用いられているわけではなく、「遊魂」や「夢の世界」という異界の一種を指す語として用いられる場合もある。「枕中記」に関する研究でも、魯迅をはじめ、多くの研究者が、この作品を「人生は夢の如し」という趣旨の「夢」物語として捉えている一方、物語から「異界訪問譚」としての要素を見出す論考や、作中の「枕中の空間」に注目する論考なども見られる。しかし「枕中記」がこのような異世界訪問譚の要素をも備えているとする見方があるにもかかわらず、なぜ「儂い夢幻」としての「夢」の物語とされることが一般化したのか、「枕中記」は物語成立時よりそのような物語と扱われていたのかといった物語の捉え方に関する觀點は、従來の分析の對象にはなっていなかった。またこの問題は、「枕中記」と「南柯太守傳」との關わりにおいても同様のことがいえる。「枕中記」は、「南柯太守傳」と“類話”として比較對照されることが多いが、これら二作品も、物語をどのように解釋し捉えるべきかという検討はなされていても、いつから、またどのような觀點から、同種の物語とみなされたかという問題についてはあまり検討されていない。

この第2章で確認した先行研究の問題點から、第3章以降は、「枕中記」の捉え方、そして「枕中記」と「南柯太守傳」とがいかに類話として一括されていったかという物語の捉え方を中心に考察を進める。

第3章「『枕中記』の“夢”と“異界”を巡る物語認識の變容 — 『太平廣記』の分類を手がかりに —」では、北宋初頭に成立した『太平廣記』での「枕中記」の分類に注目し、「枕中記」に對する認識の變容を検討している。『太平廣記』には「夢部」があるにもかかわらず、「枕中記」はそこには收められず、「異人部」に収録された。『太平廣記』「夢部」の物語に記される「夢」を分析すると、「人とそれ以外の存在、あるいは人界とは異なる世界を結びつける」という媒介經路としての特色を有していることがわかる。また「夢部」所收の「枕中記」と類似した構造を持つ物語「櫻桃青衣」、「沈亞之」の「夢の世界」と、「枕中記」の「枕中の世界」の空間的特徴を比較すると、前者の「夢部」の物語の「夢の世界」は、「夢」という物理的な形をもたない存在に媒介されて訪れる場であり、また當人の目覺めによって唐突に崩れ去ってしまう脆さを有した世界である。それに對し、「枕中記」の「枕中の世界」は、「枕」という物理的な殻に圍まれた空間内にあり、「枕の穴」という同じく物理的入

口を通過してそこに至り、その世界での死という区切りを以てもといた邯鄲の宿へと戻っており、両者のもつ空間的性格は多分に異なる。そして「枕中記」が収められた「異人部」は、「市井に現れた不思議な能力を持つ人物」の物語が収録されている。「枕中記」における「異人」とはすなわち「道士呂翁」を指す。この点から、『太平廣記』の捉える「枕中記」とは、盧生が「夢の世界」を通じてもう一つの人生を過ごすことで、人生の儚さを悟る物語というよりも、道士呂翁が、盧生を不思議な枕によって悟らせる物語と捉えた可能性も考え得るだろう。さらに物語成立直後から南宋あたりまでの「枕中記」の扱われ方を見たとき、当初物語を代表する語としては「枕」や「枕中」が用いられていたが、徐々に「夢」や、盧生の過ごした別の生涯がいかに儚い時間であったかを表す語「黃粱」等が用いられることが増える。つまり、題にまで提示された「枕」の存在は、後世に下るにつれて薄まりつつあったともいえる。

第4章「後世における「枕中記」の受容—南宋から清代までの「枕中の世界」の變容—」では、南宋から清代に至るまでに「枕中記」がどのように受容されていったかを詳細に検討した。十二世紀の洪邁や十三世紀の王應麟の「枕中記」に対する言及を見るに、南宋期は「道士の枕」の存在が薄らぎ出す兆候は窺えるものの、「枕」は依然として物語を象徴する存在として扱われていた。しかし元代以降、「枕中記」の受容の中で、「道士の枕」は急速にその影を潜めて行く。明代の戯曲『邯鄲記』には、「道士の不思議な枕」は登場したが、元の雜劇『邯鄲道省悟黃粱夢雜劇』や、清代の『聊齋志異』所収の小説「續黃粱」などの「枕中記」をモチーフとした戯曲や小説では、青年が「別の人生を経験する」ために必要とした条件は「眠り」や「夢」のみであり、もはや「枕」の存在は不要となっていた。後世の讀者にとって、「枕中記」の中の「枕」は、「眠り」や「夢」に比べると、もはやさほど重要な存在ではなくなっていたのである。

このような物語觀の變化は、「枕中記」と「南柯太守傳」とを“類話”とする認識の形成にも関わってくる。第5章「「南柯太守傳」と「枕中記」—“枕中”と“蟻穴”の「夢」物語への一元化—」では、主に「南柯太守傳」を取り上げ、「枕中記」と「南柯太守傳」が“類話”とみなされるようになった過程について検討した。現在では「南柯太守傳」は、「枕中記」と一括して、もう一つの生涯を夢見る唐代「夢」物語として語られることが通常である。しかし、物語成立直後に記された『唐國史補』や、北宋の『太平廣記』などでは、「枕中記」と「南柯太守傳」は別種の物語として扱われており、「枕」や「蟻（蟻の巢）」といった物語特有の要素が重視されていた可能性が窺える。その後の北宋後半～清代にかけて、「南柯太守傳」は、それをモチーフとした詩や、小説、戯曲などの中で、「眠り」や「夢」、時間構造といった「枕中記」との共通要素を以て、「枕中記」と“類話”として扱われるようになっていく。他方「南柯太守傳」は、「夢幻」や「眠り」と関連づけられ、「枕中記」と“類話”として一括されていった反面、「南柯（太守）」、「槐安」といった語が一貫して物語を示す語として用いられ、さらには「昆虫の国」の要素も清代まで引き継がれており、その受容の様相は「枕中記」とは對照的といえる。

最後の第6章「『枕中記』観形成の背景—『枕中の空間』の消滅と『陶枕』—」では、「昆虫の国」という要素が残った「南柯太守傳」に比べ、「枕中記」の「道士の枕」や「枕中の空間」はなぜ後世に至るにつれてその存在が隠れていったのかという、「枕中記」に対する捉え方の變容の背景について主に考察した。この章ではまず、「枕中記」が「夢」と強固に結びついた要因の一部として、①盧生が「枕中の空間」へと入る際に「寐中（眠りの中）」の語が追加された陳翰『異聞集』系統のテキストの流布と、②「人生は夢の如く儂い」といった物語の暗示する寓意の問題を取り上げた。特に、盧生が「枕中」に入る過程に「寐中」の語が加わることで、盧生が「枕」や「枕中へと入る」行為よりも、「眠り」や「夢」がより強く意識されるようになるだろう。しかしそれだけでは「不思議な枕」の存在が影に隠れていった要因を説明しきれない。そこで本章ではさらに「枕」それ自體の變遷に注目した。

「枕中記」に登場した、穴の空いた陶枕は、唐宋代に隆盛したものである。しかし元から明にかけて陶枕は衰退していき、明代にはすでに日常的なものではなくなってしまった。そしてこの陶枕の衰退時期と、「枕中記」の「枕」の存在が明確に薄まった時期はだいたい重なっている。こうした點から、「枕中記」に見られた「道士の枕の中の空間」が後世に下るにつれて、人々の認識下からその重要性が低下していった一因には、人々の捉える「枕」という日用品それ自體の形状が、唐代から變化したこともあるのではないかと思われる。

以上のように、「枕中記」が「人生は夢の如し」を趣旨とした夢物語と捉えることが一般化し、作中の「枕中の世界」が「儂い夢」として扱われることが定着するまでの過程については、次の通りまとめることができる。

唐代～北宋代初め、「枕中記」は、「夢（あるいは眠り）」の要素以外に、物語の「枕中」や「道士呂翁」にも注意が向けられていた形跡が窺える。また「枕中記」と「南柯太守傳」とは比較對照ですらない別種の話として扱われる傾向にあった。その後の北宋後半～南宋にかけて、文人たちの詩歌や敘述の中で「枕中記」を表す語として「黃粱」や「黃粱夢」が用いられることが増えていく。「夢」の語との結びつきが強まるのみならず、作中にて「眠り」や時間構造といった共通する要素があることから、「枕中記」は「南柯太守傳」と一對のもの、あるいは趣旨を同じくする「類話」として扱われ出す。元～清代には、「枕中記」をモチーフとした戯曲や小説がいくつか作られたが、「枕中記」を示す語としては引き続き「枕」の代わりに、「黃粱」や「夢」、「邯鄲」といった語が用いられている。さらに、それらの作中にて青年が別の人生を體驗するにあたり、不思議な「枕」とその内部にある空間の存在が全く出てこない作品も登場する。これは「枕中記」の「枕中の空間」の存在感が急激に薄まったことを意味するといえる。そして近年に至り、「枕中記」は、「南柯太守傳」と唐代「夢」物語の代表例として一括されることが通常となり、物語中の「枕中の空間」はやはりさほど注目・重視されない状況にある。

上記のような物語に對する捉え方の定着によって、「枕中記」に備わっている「道士の枕の中にある異空間」は、「夢」という一語で單純に言い表され、それが備えていた特色は認識されにくいものとなった。「枕中記」が「儂い夢」物語として定義付けられた結

果、その題に掲げられたはずの「枕中の空間」は覆い隠されてしまったともいえるだろう。そしてこうした「枕中記」に対する認識が一般的なものとして定着するまでの背景としては、「寐中」や「黄粱」の語が加えられた『異聞集』系統のテキストの流通や「束の間の夢」を想起させる物語の寓意性、時間構造や「眠り」等のその他物語との間の共通要素に注目する視点の発生、さらに「陶枕」のような内部空間と穴をもつ枕そのものの衰退といったことが挙げられる。

このように、幾重の段階や要因が重なることで、「枕中記」は「人生は夢の如し」を趣旨とする「夢」物語であり、作中に登場する「枕中の空間内にある世界」は、「儚い夢幻」として捉えられることが一般的な解釈・捉え方となった。そして現在そうした“常識”が暗黙のうちに基盤にあった場合、読み手はまるで最初から物語がそのように描かれ、かつ認識されて来たかのように捉えるのではなかろうか。そしてそれは、その今日“常識”的とされる捉え方が形成されるに至るまでの、様々な過程や背景といったものを齊しく不可視化させることをも意味するのである。